

# 富士山写真大賞展

毎年の年末になると一年を一字で表現する「今年の漢字」が発表されます。2018年(平成30年)の漢字は「災」でした。

確かにこの一年、「今までに無い超強烈・・・」、「100年に一度の・・・」、「記録をとり出して以来最悪の・・・」などの見出しをつけた自然災害が当たり前のように発生しています。大きな山塊の斜面すべてが崩壊した風景、豪雨で湖になってしまった町並みなど、想像を絶する自然災害の情景にただ息を呑むばかりでした。2011年3月11日の東北大震災で初めて登場したスマホによる津波被害の現場写真の壮絶な映像に圧倒されて以来、自然災害の風景にだいが慣れてきたと思っていたにもかかわらず、どのシーンを見ても圧倒されるばかり。災害現場での臨場感はその場にはない限り撮れるものではありません。写真人口はスマホの普及に正比例して裾野を広げ、映像の世界に革命を起こしているといっていいいでしょう。災害時の緊迫した映像では作画の巧拙より臨場感こそ大切です。写真の持つ特徴・記録が大いに発揮される場面です。

ところで山岳写真、風景写真の世界では、こんな「災」と決め付けられる年は案外「豊」といえる年でもあるのです。落ち着いた山が風や雲の激しい動きで表情を変えるのです。

気象の変わり目が狙い目で、大きな山や森林、湖や草原まで浮き浮きとさんざめくようになります。滅多に出会えない光と影の競演…。危険と背中合わせのシャッターチャンスなのです。

今年の富士山大賞に「災」がどんな影響を与えるだろうか。独立峰の富士山なればこそどんな乱雲や気象現象が見られるものか、1210点という今年の応募作品を前にしてわくわくしたものでした。その結果がここにご覧いただく作品群です。

まず金賞の「富士山とブロッケン現象」です。

ブロッケン現象とは高山で見られる気象現象の一つ。登山者の背後から太陽光線が射し、前面の薄い霧のスクリーンにその影を投影する現象で、黒い人影を虹の輪が囲んでいるという神秘的な姿に、日本では阿弥陀仏が光背を背に現れる「ご来迎」と呼んでいます。

これは南アルプス・北岳のテント場での作品ですが、選者の目を引いたのは3つの光をバランスよく捉えた構成力でした。左に七色の光輪を耀かせる華麗なブロッケン、右には夕闇に沈みゆくシルエットの富士山、下はラテルネの灯るテント群。明暗の対比、華やかさと静寂。この1点の作品にはテント場を覆っていた雲霧が強風に吹き払われる偶然、背後の雲にピンポイントで開く太陽光線の光束、前面に僅かに遺された霧のスクリーンなど、文字通りの一瞬のシャッターチャンスを逃さなかった作者の執念が結晶しているというのが、私の直感でした。動かない山・大自然と思われるものの持つ想像を絶する複合運動を読み取った作者の腕前には脱帽です。

問題が無いとも言えません。これは応募作品の総てに言えることですが、写真作品は印刷かプリントが命だと思って載せたいと言うことです。素直なコントラスト、見たままの色彩の再現が基本。感動して切り撮った原点の再現が良いのです。感動もなしに撮影した写真を漫然とプリントしても、記録以外の心の共鳴は生まれるはずありません。そのなによりの証拠はこの会場に飾られている作品群の美しさが語っています。

富士山大賞の会場で展示されているプリントは、最高水準の技術によって原作品の良さを十分に表現しているのです。良いプリントを創る勉強をして欲しいものです。

銀賞は天野喜夫さんの「昇陽」。何という端正な、静謐を湛えた作品ではありませんか。構図も左右均等のバランスがきっちり決まりすぎるくらいで、これ以上動かしようがありません。その静けさの中で富士山の上へと昇っていく太陽の光だけが異様なほど生き生きと輝いているのが印象的です。強烈な太陽の光を画面の中央部に入れる作画は、自分の撮影機材を使い尽くし、レンズの性格を十分に把握しているからこそ出来ることです。普通ならここまで太陽が上がっていたらゴーストが怖くてシャッターは切れないものです。経験と計算が出来る愛機なればこそその作画と言えましょう。日本人の心の山を見事に表現出来た作品、という評価は言い過ぎでしょうか。

第3位の銅賞は「霊峰の頂」、勝亦裕さんの作品です。日暮れて間もない富士山の頂上部分を切り取った作品です。フィルム時代には手の出せなかった夜の撮影も、ISO感度を自由に換えられるデジタルカメラにとっては新しい撮影分野になっています。最近では新しい荒野を開拓するように夜間撮影に力を入れる傾向でさえあるようです。この作品は標高3776メートルの高所からみあげる星空の美しさが主題ですが、透明で冴えきった高山の大気のためか、凄まじいほどの星屑達に圧倒される想いです。かつて静けさに沈んでいた夜の山の、何という賑わい。舞台は日本一の富士山です。星達の演奏する壮大な交響曲にこれ以上相応しい場所はないでしょう。

惜しくも第4位になったものの斎藤儀憲さんの「富士樹海」は明るさが目を引く作品でした。前景にヤマツツジの花を入れた構成は広い風景を撮る際の定型です。この前景に何をどう入れるかはとても大事なことで、広い、とりとめのない風景がびしっと締まってくるかどうかの境目です。中景には西湖、遠景には新緑の青木ヶ原の樹海とすっきりと聳える独立峰・富士山。左手から射し込む爽やかな午前の太陽が刻み込むような光と影の彫刻が、距離感や広がりを見事に表現して、平凡のように見えて実は非凡な、箱庭富士をきちっと纏めているのはさすがです。

対照的に明暗だけで作画しているのが「静寂に明けゆく」の筑木親久さん。シルエットの富士山を画面の左3分の1におき、夜明けの色づいた雲と田貫湖への映りこみが華やかに左3分の2をしめ、ハイライトの湖面に釣り師のシルエットを入れることで静かな画面に小さな動きを与えている。大自然の中に何の違和感もなしに人をいれることで画面を締めて成功した作品です。

富士山大賞は本家本元の富士山だけでなく、いわゆる故郷富士、日本各地に散在する「おらが富士」も対象にしています。その趣旨がまだ知られていないせいか本気になって取り組んだ作品は少ないようです。今回特別賞に選ばれた「阿寒富士と初氷」は阿寒湖に浮かぶ初氷と夕映えに燃える雌阿寒岳の寄生火山・阿寒富士との対比で北国の初冬の寒さを写し取った作品です。この山だけでももっと撮り込んでいけば更に優れた作品が生まれるに違いありません。もちろん有名な羊蹄山に取り組んでみるのも良いでしょう。この入賞を機に本気になって取り組んでみて下さい。

富士山大賞も今回で20回の節目を迎えました。富士山という大自然と真っ向から取り組んできて、今更ながらその懐の深さに驚いているところですが、今回は1点だけ今までとは異質の写真を取り上げてみました。高野良介さんの「なかよし」です。雪の富士山を背景にした、フクロウと幼児の記念写真です。無垢の子供のせいかフクロウと富士山が違和感なく解け合っているようなのです。記念写真といいながら童話の世界でもあるような雰囲気を感じたのですが、いずれにせよ、富士山大賞はおおらかで自由なのだというメッセージのシンボルと受け取って戴ければ幸いです。

今回も入賞作品が素晴らしいプリントで用意されました。写真作品をご覧になる鑑賞者のため、また、渾身の思いで作品を撮影した作者のためにも、最高のプリントで会場を飾れたことに心より感謝いたします。

三宅修 (写真家 1932年生)

